

# 羽衣村広報

発行 羽衣村広報課  
毎月1回発行

## ユーカリ・ボードウォーク顛末記

あるべき姿に戻すこと

天女の舞い降りた三保松原に消波ブロックも護岸提もなかったのは当然のことである。ボードウォークもあるはずはない。ご承知おきの通り、三保松原はイコモスからの除外勧告を受けた上での登録であった。歴史を見れば三保松原を外しては富士山の文化を語ることはできない。しかし文化の飛んだ今の日本、四十五キロ離れてなぜ三保松原と富士は一体なのかを訝

る人は海外の人だけではない。その上で構成資産に認めていただいたことは、三保松原を本来あるべき姿に戻す使命を担ったことと理解している。だからこそ、国内法からみれば何の問題もないにもかかわらず、県は指摘を受けた海原にうず高く積まれる消波ブロックの修復に着手した。「三保松原を本来あるべき姿に戻す」とはできる限り自然の景観に戻すこと。畢竟、松原を自然の状態の戻すことであり、砂

地の回復といつてもよい。松原に手を入れることは砂の腐葉土化を防ぎ菌根菌を育む。そこに松は生きる。翠の維持には人間と砂が必要なのである。これは自然と人間の共生社会の再生であり、究極には循環型再生エネルギー共同体を目指すことである。私たちは藻谷浩介氏に学び、これに三保松原の文化の復興も加味し「羽衣ルネッサンス構想」とした。

### なぜか、隠密にすすんでいた計画

今回の静岡市のボードウォーク図面を初めて見せられたのは、2016年3月8日だった。ボードウォークの説明会ではなく、別の目的の会合に、すっと挟まれた形で披露された。詳しい説明はなく、まだ決定事項ではないとコメントされた。自治会

以外の市民に公開されたのはこれが初めてだろう。あまりに簡単なデザイン図のようなものであったが、本来、保護すべき場所に立ち入らないように誘導するボードウォークが、守るべき場所そのものに張り付いている。嫌な気がしたのでその後、人を労して企画書と図面をやっと手にしたのが2016年4月27日。図面を見ただけで気が遠くなった。描かれていたものはボードウォークなどという代物ではなく、羽衣の松周辺に巨大テラス、あるいは大型デッキを置くような目を疑うものであった。総工費一億八千万、設計費七百万と聞い



た。神の道参道を経て、坂道を上り、視界が突然開け、松と海の景観が広がる。「わあー」と歓声の上がる場所に巨大な板の建造物が広がることになる。何故か、翌、4月28日は市職員と業者が我が家からつと並び、連休明けから着工を宣言して帰って行った。その後の顛末は省くが、今は着工延期となっている。(平成28

年8月10日現在)

この計画を知らずにいた当方も間抜けであった。市情報調べれば2015年6月24日には測量設計業務委託が入札され、工事の入札は2016年2月2日に一度入札が流れその後3月17日には入札が完了していることがわかる。議事録からは、一回目の入札が不調に終わったいきさつを課長が答えたやりとりが記録されている。いやしくも政令市であれば、地域の合意形成がされた上で事業が進むと考え、疑ってかからなかったことが失態であった。

## 一体だれが望んだ計画なのか

そもそも、今回のボード設置場所は砂山全体に固結層があり水も吸わず吸収されない。雨水が滝のように流れ、松の水スト

レスが専門家によっても指摘されている場所である。三保松原を思うならば、まず、この環境の改善が先決である。ここには松原内でも一番古い松が何とか生きながらえているのである。松は常盤とはいえ寿命もある。伝説を今に伝えた長年の功績を感謝し今度は私達が静かに松を労わる段階にきている。土台の弱った斜面に重いユーカリ材を置き、478箇所、400ミリ四方の穴をあけ天然石を引き詰め基礎を打てば砂に眠る菌根菌や菌糸はダメージを受ける。凶面とおりであればバリアフリーをうたいながら利用するには勇気のいる構造物ができる。富士山は見えない。無茶な施工は土台をますます痛め、最悪の結果をもたらすだろう。長さ120m幅4mの建造物を無理につくるなど、どんな保全策を並べたて

られても現実的な話ではないが、1m100万超かけてまで、この事業を強行し、利するものは一体何なのであろうか。

このようにあまりにもリスクが高い施工だが地域の要請で計画されたという。が、了解を取り付けたという連合自治会長でさえ正式な凶面は見せられてはおらず、今のところ地域の要請者とおぼされるのは地元市議一人しかいない。しかし松の知見は解らないと言うばかりで、主体者かというところでもないように思う。一体だれが望んだ計画か今だに杳としてわからない。

地元有力市議が音頭をとったせいなのか、連合自治会長もこの事業の是非に曖昧な態度であった。私たちNPOでは、総会での講演に難波副知事と静岡副市長にお声をかけさせていただき、結果的

に難波副知事の講演が6月5日に実現した。世界文化遺産の内容や今までの経緯を明快に解説してくださり、今回のボード計画の問題点を指摘された。講演を通じて私たちは今回の計画に最初の覚えた怒りの理由が、三保松原の真正を傷つけられていることにあることを自覚した。その後、この話を知った藻谷浩介氏が6月15日かけて下さり、三保松原の講演会を催した。地域の宝の真価を共有し、日本の宝はどこまでも日本の材料で修復する。地域に根ざした経済サイクルを取り戻すことが、消費経済に摩滅されることない新しい価値観と幸福感の創出につながる。藻谷氏の言葉は羽衣ルネッサンス構想をコソコソ進める私たちに勇気を与えて下さった。

## 糠に釘

2016年7月12日有志7名で静岡副市長を訪ね、この計画をきちんと説明することを要請し、7月21日市の出前講座「みんなで守ろう静岡市の文化財」の中でそれは実現した。俄かな会合にも関わらず関係者や地域住民が50名弱集まってくださった。この時の市担当者からはじめてのボードウォークの説明をうけたが、質疑に対応した年長の担当者の発言は参加者にとっては耳を疑うものであった。端的に言えば担当課として富士山世界文化遺産の専門性を備えていない。文化財課を担うにはあまりに無知で、本人の勝手な解釈に終始し、観光の利活用の観点しか持ち合わせていないのである。質疑はかみ合わず糠に釘状態であったが、厚顔無恥で、恬として恥じる様子もなかつ

た。こういった場合、糠より釘のストレスのほうが大きいものだ。驚くべきことに、「これだけの人工物をつくり世界文化遺産の理念をどう考えているか」との質問に対しては、「人工物の良しあしは個人差があり、今回の計画は松の中にあるから関係ない。さらには土壌の改善と建設を平行して進める。」と言つてのけたのである。

目指している方向は果たして同じだろうか。

一体だれなのはかわからないが、確かなことは、この計画をした人は「砂は歩きにくくて多くの来訪者が困っている」と考えたのだろう。もちろん間違つてはいない。海水浴場に板を置くようなものだが、市も、市議も、設計した人も根を踏まない方策として一挙両得の妙案

と考えたのだろう。「ボードウオーク（木道の遊歩道）とういう方策は周知してある。」何の疑義はなかったものと思われる。しかしながら、それが出来上がった場合の風景がどのような一変するののか気にも止めないところに本質にかかわる根深い問題がある。

この松原に蓋を被せる計画が松の保全にさえつながらないことは前にも申し述べた通りであるが、今回の事件は三保松原の文化財としての真価を理解する気持のない人々が市政の中に大勢いることを教えてくれた。「砂は生きていく、砂も宝、松の命、砂も美」といったところで笑止千万と考えるだろう。「目指している方向は皆さんと同じだと思いません。」は市の決まり文句だが本質の理解が違う以上、申し訳ないが同じ方向になりようがない。先方は

当方を平均的な住民ではなく、偏狭な意向と考え、隠密に進めた計画に後ろめたさはない。当方は彼らとの折衝が、まるで異星人との邂逅に思える。

### 羽衣伝説

さて、能「羽衣」は天上界の天女と地上界の人間の交流の物語である。その日、住む世界の違うはずの二人は三保の松原で出会った。天女は、「ここは天国ではないのに天の世界のようだ。」と言ひ、白龍は「見慣れた三保の景色であるはずなのに、自分のような身分卑しいものも見惚れるような美しい景色だ。」と言う。天女は月の宮人で異星人である。三保羽衣伝説は生まれるも育ちも違う異界の者どうしが、同じ美意識を共有したことにお話しの発端がある。朝の出会いから夕刻の別

れまで有名な羽衣のやり取りには、いささか長すぎる気もするが、能作者の美の驚嘆がなかでも三保の陽光富士にあつたとすればドラマの起結になるのは当然のこと、時間にはむしろ問題ではない。陽光富士は、霊峰が天、地、海と奏でる光の演出であり、この刹那の美の舞台こそが私たちを瞬時に異次元の幻想の世界に導くものだからである。ただ事ならぬことがおこる予感を抱かせるのにこれほど相応しい場所はない。

日本にあまたある羽衣伝説が、三保松原の専売特許のように語られるに至った理由の一つは、三保の富士が、心のかえりゆく行方を多くの日本人に暗示し美の共感をもたらしたからであろう。この地を守ることは、日本の美意識を後世に伝えることだと私は考えているが、美とは何か、その本

質を共有することは今の日本では困難を極める。それでも遠つ世の天女が再び舞い降りる松原を指したいのである。

(遠藤まゆみ)

### 羽車神社とは何か

Q 御穂神社から神の道を海岸に進んで砂丘提の頂上に立ちますと、老松が並ぶ砂浜と眼下に広がる海が突然のように広がります。この全国で唯一ここでしか味わうことができない「驚き」を体感しようと多くの人々が訪れています。

羽衣松周辺は、ここに育つた者にとっては羽車神社の社領で聖域という意識が高い場所です。当初市議が示した図面は、建造物の範囲はもっと長く、羽車神社を取り巻いていました。汚された気持ちでした。本日はこの

場所の文化史的な価値について、郷土史家の渡辺さんに教えていただきませう。三保松原の中で、この場所にはどういった価値がありますか。

●第一に重要なのは、この付近に代々の「羽衣の松」があつたことです。16

世紀の半ばには山科言継（ときつぐ）が現地で羽衣松を見えますし、17世紀初頭の県立美術館が所蔵している「富士三保松原凶屏風」



にもはつきりと描かれています。明治34年には高山樗牛が「羽衣松」の名残を見たとき書いていますが、その時にも世襲された「羽衣松」はあつて、これが平成25年に下方を残しておくことになった松ですが、実は樗牛の関心は根元がのこる前代の松にあつたのです。もちろん他にも海に沈んだ代々の松のことも記録に見えますが、時代時代にこのエリア内で整った大型の松が「羽衣松」に選ばれたのです。また、羽衣松に寄り添うように羽衣神社が祀られていることもこの場所ならではの特徴です。

Q 先代の「羽衣松」の東側にある羽衣神社のことですか。

●羽衣とは、『竹取物語』のカグヤ姫が月に帰るときに使った乗り物のことで、地元では御穂神社の

御祭神大己貴命（おこなむちのみこと）（大國主

命）が乗つてきた車（あるいは驚）であると伝えられています。享和三年（一八〇三）の「羽衣天女祠碑」の「羽衣天女祠」や、江戸時代の地誌『駿国雑志』では、「羽衣磯田社」と見え、海中に没していた時期もあつたようです。御穂神社の離宮であると説明されていますが、現在の羽衣神社が「羽衣松」の傍らに祀られているように、かつての「羽衣神社（羽衣磯田社）」も松に寄り添うように祀られていて、「羽衣松」が水没して世襲されると、石製に代わった祠も松に随伴して移動したのだと考えられます。

Q 「羽衣松」が枯れて世交代をしましたが、羽衣神社はかつてのように移るのでしょうか。

●羽衣神社は宗教法人登記がされている神社で、351平方メートルの境内地（三保二八七番地）を所有しており、かつて

の参道も市道2149号線（三保7号線）として平成三年（一九九一）七月十一日に市道に認定されています。しかし政教分離の観点から当代の「羽衣松」の傍（市有地）に社を移す訳にはいかないであります。今後は現在の場所に固定されると思われまふ。

Q 今回のボードウォーク計画ですが。

●道路法に係る工事や境内地を外して設計をするのは大変なご苦労であつたと思ひます。ただ、この場所に多くの来訪者がみえて、この場所が特筆されているのは、最初のご質問にあつたように砂堤に立つて見下ろした時の驚きにあるのでしよう。繰り返せば、ここが他に比べて特段に大径の老松群が点在し、その根元に広がる砂丘ばかりでなく、世襲される「羽衣松」と一緒に移動した「羽衣神社」

がありました。しかも現在の沖合に没したとされる時代には、祠から富士山をダイレクトに遥拝することができました。そうした宗教的な雰囲気を守り伝えることができてはじめて、ここは松原の本質的価値に近づくことができる唯一の場所であると思ひつています。

静岡市清水区三保1282-1

NPO法人三保の松原・羽衣村

それいけコクモ隊からのお知らせ

整備ボランティアのお願い

羽衣村では毎週水曜日と土曜日の9時から11時まで（年末年始と盆は休み）、羽衣松から鎌ヶ崎にかけて草取りと松葉かきの整備をしています。企業の方々、ご家族、学生さんなどなたでも参加できます。雨の日はお休みです。松原の環境整備には是非ご参加ください。